

学生の主体的な学びを推進する授業改善—下位大学選択科目における試み—

清水 亮

三重中京大学 現代法経学部

I. はじめに

文部科学省は、2008年4月から大学でもFDを義務化し、「学士力」と表現される一定レベルの教育の質の保証を各大学に求めようとしている。2008年12月に出された中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』では、大学教育の教育観を従来の教員中心、内容重視のものから、学生中心、ラーニングアウトカム重視のものへ転換することの必要性が強調されている。つまり、大学教育において、「教員が何を、どれだけ教えるのか」という教育から、「学生が何を学んだか、何ができるようになったか」を重視し、「当該大学から卒業する学生の質保証を明確にする」ことを求められている。

同時に、大学全入時代を迎え、大学の自然淘汰が始まりつつある。2009年10月週刊東洋経済と週刊ダイヤモンドは、1週間違いでそれぞれ大学に関する特集を組んだ。「今、日本の大学は試練のときを迎えている。少子化、底辺校の粗製濫造、そして淘汰・再編。」今ほど、大学の教育力が問われている時はない。

II. 橋本メソッドと山田メソッド

橋本メソッドを導入して数年、授業を展開する中で、なぜ学生はレジュメも満足にまとめられず、発表もろくにできないのかと考えるようになった。発表もろくにできないので、橋本メソッドの妙味であるゼミを髣髴とさせる十分な質疑応答までにはいたっていない。

初年次教育の演習Iと呼ばれる基礎ゼミから始まり、4年次の演習IVまでカリキュラム上、演習は存在しているものの、もともとDP、CP、APなどを熟慮して設定されたものではなく、各演習の一般目標、到達目標も存在していない。そのようなカリキュラムの下、ほとんどが学力不問で入学してきた学生を相手では、橋本メソッドを導入しても、形だけで終わってしまう。橋本勝の岡山大学や就実大学での実践とは程遠い。そんな学生たちが主体的に学ぶようになる仕掛けは何かの試行錯誤を繰り返す中、今年度は、後期開講の2つの選択科目で2つの試みを取り入れた。1つは、エントリー提出の際に、パワーポイントの配布資料を添付した場合、エントリーの得点を50%プラスというインセンティブの導入、もう1つは、同志社大学文学部の山田和人が実践している仮名手本忠臣蔵検定（山田メソッド）をヒントにしたオバマ検定の導入である。山田は仮名手本忠臣蔵の授業で、学生に仮名手本忠臣蔵の検定試験を自ら作らせる実践を行い、成果を上げている。後期開講の3年次以上対象の選択科目「地域の研究II」と2年次以上対象の選択科目「世界の政治」の両方のクラスにパワーポイントのインセンティブを取り入れ、「地域の研究II」にはオバマ検定も取り入れて、学生のさらなる主体的な学びが推進できるかを試みた。

III. パワーポイント・インセンティブの効果

学生たちは、1年次の必修科目である情報処理基礎のIとIIの授業の中で、パワーポイントの使い方を学習しているものの、2年次以降の授業や演習で、学生がパワーポイントを自ら使う必要がある授業は皆無、演習もほとんど存在しない。三重中京大学では授業のほとんどが、旧態依然たる

授業形式、つまり教員が一方的に教壇で話す形で行われている。そんな中での橋本メソッドを導入、チームで2回のエントリーだけでも、学生たちは、レジュメをまとめるのが精一杯で、うまく発表に選ばれても、棒読みするだけで終わっていた。パワーポイントを準備できれば、発表の役に立つはずで、エントリー得点を10点から15点に50%アップするという仕掛けを今学期から導入した。導入の狙いは、パワーポイントの配布資料をエントリーのレジュメとともに提出してきたチームに、できる限り発表の機会を与え、他のチームにパワーポイントを準備しなくてはと思わせて、エントリーの競争ゲームに巻き込むことであった。

後期の授業を始める前までは、パワーポイントに関しては、3年次以上対象の「地域の研究 II」の方が演習の核となる3年次の演習を経験しているのも、後期からやっと専門の演習に入ったばかりの2年次以上を対象としている「世界の政治」よりも、パワーポイントのインセンティブに反応するだろうと考えていた。しかし、実際に授業が始まると、エントリーにパワーポイントの配布資料が添付されてくるのは「世界の政治」だった。パワーポイントの配布資料を同時に提出するチームは、2年生のチームだった。旧態依然たる大学の授業に慣れてしまっている3年生、4年生とは違い、2年生は、初めて橋本メソッドの授業を受け、こんな授業もあるのかと臨んできたようである。また受講者の中に、前期開講の専門ゼミへの導入演習の演習 IIA で担当した学生、後期からの演習 IIB で担当している学生がいて、それぞれの演習でパワーポイントによる発表を課していたことが幸いした。彼らがピアとなってチームを引っ張っていた。

IV. オバマ検定

橋本メソッドを導入し、授業では、各チームに2回のエントリーを課しているが、学生は自らのエントリーに専心するあまり、他のチームのテーマにはあまり関心を示さないことが分かってきた。エントリーが終わっても授業に参加させることを目的に、同志社大学の山田和人の仮名手本忠臣蔵検定をヒントに、「地域の研究 II」では、エントリー時に、テキストの渡辺将人『オバマのアメリカ』（幻冬舎新書 2008年）を読んだ人なら分かる4択のクイズ3題を学年末試験のオバマ検定問題として提出する仕組みを導入した。自分たちのエントリーが終わっても、他のテーマにエントリーし発表にいたったチームのレジュメに注目し、発表をしっかりと聞かせることが狙いだった。

エントリーに加えて、自ら学年末試験の問題を作ることを負担に感じた学生・チームは早々に脱落し、実際の受講者数は履修登録者数の7割程度となった。しかし、残った受講生は、狙いどおり、自分たちのエントリーしていないテーマについても、今までの橋本メソッドのエントリーの発表よりはるかに集中して発表を聞き、検定問題に出そうなトピックは何かを考えるようになった。違ったテーマをエントリーしたチームが、ピア・ツー・ピアになり自分たちのチームが作った検定問題を共有するようになり、お互いにどこに答えが書かれていたのかを教えあうようにまでになった。

V. 選択科目を通じての教育改善

橋本メソッドを下位大学で導入し、いきなり橋本勝の岡山大学や就実大学での実践のような成果を上げることはなかなか困難である。しかし、下位大学でも、ある程度科目に興味がある学生が集まる選択科目を活用することで、学生の主体的学びを推進することが可能である。触媒として、パワーポイントによる発表指導や、何々検定の山田メソッドを同時に導入しながら、ゼミにおけるピア・ツー・ピアの教えあい・学びあいを授業の中に創出することにより、学生が主体的な学びの入口に導けたのではと考えている。次年度は、中部大学の大門正幸の全員先生方式をさらに取り入れて、さらなる教育改善を試みたい。